

‘Detachment’ と ‘Involvement’ について

— *Under Western Eyes* の場合 —

伊 藤 治 男*

A study on Detachment and Involvement in *Under Western Eyes*

Haruo ITO

要 旨

この論文は第1章において問題点を指摘し、第2章にはそのあらすじを述べ、第3章においては、Detachment と Involvement の観点で、この作品を分析しようと試みるものである。

Synopsis

This article intends to point out the specific problems in this novel in the first chapter, in the next chapter, summarizes the plot, and finally tries to analyze the meaning of detachment and involvement in *Under Western Eyes*.

I

Under Western Eyes は1910年～11年にかけて雑誌に連載された後、すぐに発刊の運びになった。1904年、大作 *Nostromo* を書き終えた後、1970年 *The Secret Agent* を書き、*A set Six* を1908年に書いていた Conrad は、その間、終始、痛風と経済的不遇とに悩まされていた。そして、その病いと、実生活上の労苦の中でこの *Under Western Eyes* が生まれたのだった。

発行の9年後に書いた Authors Note に次のようにこの作品の目的を述べている。

This reflection bears entirely upon the events of the tale : but being as a whole an attempt to render not so much the political state as the psychology of Russia itself, I venture to hope that it has not lost all its interest.⁽¹⁾

つまり Conrad が意図したものは政治情勢ではなくロシアの心理そのものだったのである。一体

そのロシアの心理とは何なのかと云う問題は、この作品の中で何度も登場する言葉なのであとで詳述することになると思う。今はまず、この作品の歴史的背景に眼を向けてみよう。Conrad がポーランド人として、ロシアの専制政治に苦しめられ、若くして両親を失い、ポーランドを飛び出したと云う、彼の少年時代の記憶は、常に彼の脳裡にあった。したがって、G. Jean-Aubry によると怨恨の情を混えずに、この物語の人物や情景を描くことは極めて困難な作業であった⁽²⁾とある。又、彼自身、Authors Note でも次のように述べている。

My greatest anxiety was in being able to strike and sustain the note of scrupulous impartiality. The obligation of absolute fairness was imposed on me historically and hereditarily, by the peculiar experience of race and family, in addition to my primary conviction that truth alone is justification of any fiction which makes the least claim to the quality of art or may hope to take place in the culture of men and women of its time. I had never been called before to a greater effort of *detachment* : detachment from

* 助教授 一般教科英語

all passions, prejudices and even from personal memories.⁽³⁾

したがって、彼がこの作品を書くにあたっては大変な精神的緊張を要したらしい。個人的な記憶からでさえ離脱しなければならなかったのだから。さてその離脱 — detachment, この言葉の意味しているものは、彼はあくまでも、公平に、冷静に、容観的に、物を見、そして描くための、作家的態度を保つための方法を今「離脱」と呼んだことになる。ちょうど、漱石の云う「非人情」にあたる。つまり、Conrad は、自分の描こうとする作品と、作家の間に、ある距離を置いてそれを決して踏み越えない努力をしたのである。恐らくそのために、イギリス人の老語学教師の眼を通して物語が述べられる方法がとられたのであろう。他にナレーターが登場する作品は 'Youth' 'Heart of Darkness', 'Lord Jim' といずれも Marlow の登場である。そして、この *Under Western Eyes* はよく *Lord Jim* と比較されるのである。それは *Lord Jim* における主人公 Jim と、本篇の主人公 Razumov の類似性が指摘されるのであろう。つまり *Lord Jim* においても、本篇においても「裏切り」が一つのテーマになっているからである。Jim がパトナ号の乗組員として、船客を裏切る破目に陥っていたのと、Razumov も Haldin を裏切らざるを得なかったその事件に巻き込まれていった状況は共通したものがあると言える。又、もう一つよく比較される作品に、この作品の前に書かれた *The Secret Agent* がある。この *The Secret Agent* の主人公 Verloc は怠情な四十男で、しかも危険な二重スパイの仕事をはき受けている男である。やはりここでも裏切りが出てくるわけだが、*Lord Jim* の Jim や、この作品の Razumov のように同情的に描かれてはいない。いやむしろ、ある種の偏見と悪意に満ちていると言ってもよいであろう。この *The Secret Agent* に登場するアナキスト達は皆、悪意に満ちて描かれていると同時に、読者と登場人物との間に、ある種の距離を感じるように描かれている。しかも彼等は戯画化されているのである。したがって *The Secret Agent* の読者はちやうど寄席で、落語か、漫才を聞いたのしみ、と同種の心境で読むことができる。例えば冒頭部分で Mrs. Verloc の描写は、

Sometimes it was Mrs. Verloc who would appear at the call of the cracked bell. Winnie

Verloc was a young woman with a full bust, in a tight bodice, and with broad hips....⁽⁴⁾とか、Mr. Verloc の描写では、

Mr. Verloc was an intermittent patron. He came and went without any very apparent reason. He generally arrived in London (like the influenza) from the Continent, only he arrived unheralded by the Press; and his visitations set in with great severity. He breakfasted in bed, and remained wallowing there with an air of quiet enjoyment till noon every day-and sometimes even to a later hour.⁽⁵⁾

と云った具合である。このように *The Secret Agent* においては、登場人物を戯画化することに成功したことにより、Conrad はこの作品を喜劇にしまったのだった。しかし、*Under western Eyes* の場合はどうなのだろう。作者の Note の中で Conrad 自身、次のように述べて、主人公 Razumov に対する態度を明確にしている。

Razumov is treated sympathetically. Why should he not be? He is an ordinary young man, with a healthy capacity for work and sane ambitions⁽⁶⁾

The Secret Agent のときは、読者との距離を広げさせる方法を選んだ Conrad はこの作品では、主人公 Razumov を身近かな平凡な人間として描こうとしている。ここにこの両者の大きな距離を見出すことができる。さて、この作品の種々の問題点が明らかになったところで、簡単にこの作品のあらすじに触れたのち、この小論の本題、the detachment と the involvement について論じてみたい。

II

理想主義的革命家、Haldin はロシア専制政府の高官 P 氏に爆弾を投げて殺害に成功し、ひそかに Razumov の下宿の室に上がり込んでいたのだった。Razumov はセントペテルブルグ大学の哲学科の学生で、父も母も居ない、まじめな、口数の少ない青年である。しかも大学で Haldin は Razumov と親しかったわけではなく、口数が少ない Razumov を信頼できる人間だと思い込んで、室に上がり込んでいたのだった。Haldin は逃亡のための馬を用意してくれる手筈になっている Ziemia-

ntich のところへその用意をたのむ。Razumov は出かけて行くが、その男は酒に酔いつぶれていて Razumov の求めに応ずることができない。Razumov は夜道を歩きながら考える。この場合、密告したら、それは裏切りなのか。Razumov の頭上には壮麗な星のかげやきが漆黒の空にあった。そして彼の下には彼が踏みつけているロシアの土があった。彼は全く物音を聴くこともなかった。ただ彼が沈黙の中に聴いたものは、魂の動揺なのだった。彼のまわりには彼が愛するロシアの全てが広がっていた。Razumov は今や、ロシアから、又は祖国における彼の若い希望や、祖国における彼の存在の場から本当に引き離されることを感じた。彼は又、本能的に彼は Haldin や革命に身をゆだねることができないことを知った。彼は Haldin を裏切り、その結果、彼は心を休めることができなくなる。

ちょうどこの部分は *Heart of Darkness* の Kurtz が、孤独の中でアフリカの自然の圧倒的な不思議な力の虜になり、象牙狩りに狂奔するに至る心境と共通しているのではないだろうか。彼が警察当局へ Haldin を売った後、Razumov は警察の監視の下におかれる。そして彼の日記が当局の手に落ちた時、彼が「正常な」生活に戻りたいと思っていた捨て切れない望みは打ち砕かれるのである。しかし彼が移住すると云う「自由」に対して支払った代償は、ジュネーヴに居る亡命者たちに対するスパイ活動することなのであった。ジュネーヴに着くと、Razumov はロシア人居住区に居を定める。そこで彼は Haldin の母と妹に会い、又、何人かの亡命ロシア人のテロリスト達にも会う。その中には、囚人からの逃亡記を書いて財をなした Peter Ivanovich や、残忍な Necator や Laspara と、献身的な Tekla、そして革命に情熱を燃やしている Sophia Antonovna 等が居たのであった。Sophia Antonova は Razumov に、運命に対してぐちを云うのは止めなさいと云う。そして彼女が指摘する彼のいつも変らぬ空虚な表情は革命運動も、彼自身をも亡ぼしてしまうと忠告する。疑惑と絶望が Razumov を無力にさせ、彼の活力を破壊してきたのだった。つまり疑惑と厭世観は彼の打ち砕かれた幻想に対する苦しみから逃がれる砦なのであった。Sophia は Razumov に最近とどいたある手紙に、Ziemianitch が死んだこと、しかも、彼は Haldin が処刑されたと知ってから酒びたりの度がさらにひどくなり、最後には自殺したと話す。Sophia も Ziemianitch があやしいと思って

いたと話す。さらに Ziemianitch が自殺する何日か前に、若い学生風の男がやって来て、泥酔していた Ziemianitch を熊手の柄が折れる程、打ちすえ重傷を負せていったと話す。そして Sophia はその学生風の男は警察のスパイだとにらんでいると話す。その結果、Razumov が恐れていた裏切り者としての嫌疑は取り除かれるが、逆に彼の心には自責の念が以前より強くのしかかるのである。Haldin の妹 Nathalie は母親に外出が急に多くなったことで不審に思われ、兄の手紙に書かれていた Razumov がジュネーヴにきていることを打ち明ける。「私」と一諸に革命家達の家を訪ねると、そこで Sophia から例の手紙の話を聞く。Nathalie が家に帰ると、Razumov が訪ねて来ていた。彼は「私」の居る前で、Nathalie に、兄 Haldin を裏切った男の正体を話す。それから Razumov は自分の部屋へ戻った後、Nathalie あてに長い手紙を書いた。それは、ベテルスブルグでのあの事件以来の彼の心理状態をつづったものであった。それから彼は Raspara の家へ行き、革命主義者たちの集まっている場で、Ziemianitch は無罪であること、自分が Haldin を売ったことを告白する。革命主義者たちの中に何人かが、彼にリンチを加え、中でも Necator は気狂いのようになって、ナイフで Razumov の両耳の鼓膜を破って、聾にしてみよう。耳が聞えなくなった Razumov はもはや雷の音も電車の音も聞えない。彼は轢かれて重傷を負う。運ばれていく途中で、偶然 Tekla が見つけ、付き添って看護をしてくれたのだった。Haldin の母は病気が悪化して死に、葬式のすんだあと、Nathalie は「私」と別れて、ジュネーヴを後にしてロシアに帰ることになる。Razumov は献身的な Tekla に付き添われて、ロシアに帰った。そして Razumov を聾にした Necator は実はロシア政府のスパイなのであった。この作品のあらすじは以上のようなものであるが、章をあらためて、本題に入ることにする。

III

Under Western Eyes は Conrad の政治小説の中では、問題作とされているその代表的なものである。この小説の評価が相当なものを得ているその一つの理由として、主人公 Razumov が事件に巻き込まれていき、しかもそれが彼の口数の少ない性格の故に深みにはまって行く過程に、読者を捕えてはなさないからであろう。では具体的にどのようなようにして巻き込まれていったか、その跡をた

どってみよう。聖ペテルスブルグ大学の学生 Razumov は K 公爵の私生児と云う設定である。つまり、家庭と云うもののない孤独な存在であった。その彼に政府要人を殺害して逃げて来た、同じ大学の学生 Haldin が助けを求めて来る。その時 Haldin の言葉、

“we are not perhaps in exactly the same camp. Your judgement is more philosophical. You are a man of few words, but I haven't met anybody who dared to doubt the generosity of your sentiments. There is a solidity about your character which cannot exist without courage.”
(7)

口数の少いのは勇気があるからだと言われて、Razumov はまんざらでもない気になる。すると突然 Haldin は「今朝、ド・P を殺ったのはばくなんだ」と告白し、Razumov があっけにとられていると、

“You say nothing, Kiryo Sidorovitch! I understand your silence⁽⁸⁾.”

と勝手に決め込む。次に Razumov が口を開く。

“But pardon me, Victor Victorovitch. We know each other so little……I don't see why you……”

“Confidence,” said Haldin.

This word sealed Razumov's lips as if a hand had been clapped on his mouth.……

“And so —— here you are,” he muttered through his teeth⁽⁹⁾.

このやりとりが、Haldin の一方的な独断と、はっきりと “No” と云えないロシア的性格を有する Razumov の心理のずれを読みとることができるのである。そして Razumov は次のように考えるのである。

“I am being crushed —— and I can't even run away.” Other men had somewhere a corner of the earth —— some little house in the provinces where they had a right to take their troubles. A material refuge. He had nothing. He had not even a moral refuge —— the refuge

of confidence. To whom could he go with this tale —— in all this great, great land?⁽¹⁰⁾

この言葉の中に、Razumov の孤独な青年像が浮き彫りにされているものは外にないと思う。そして彼は裏切りを決意する。

“I shall give him up.”

Then for some twenty yards or more all was blank. He wrapped his cloak closer round him. He pulled his cap well forward over his eyes.

“Betray. A great word. What is betrayal? They talk of a man betraying his country, his friends, his sweetheart. There must be a moral bond first. All a man can betray is his conscience. And how is my conscience engaged here : ……”⁽¹¹⁾

正にこの Razumov の言葉は Conrad 自身の言葉ではないだろうか。ここで云う ‘a moral bond’ とは信頼関係を意味する。Razumov と Haldin の間には極めて一方的な信頼しかなかったのであり、Razumov にとってはただ一方的に信頼されただけだったのである。つまり一方的な信頼関係へ巻き込まれていったのである。

そして舞台はジュネーヴへと移る。ジュネーヴには処刑された Haldin の妹と母親が暮している。兄の死を知ったあと、娘は母に次のように云って慰めるのである。

“I suggested to mother that he may have been betrayed by some false friend or simply by some cowardly creature. It may be easier for her to believe that.”⁽¹²⁾

この言葉は裏切り者を探し出そうとしている妹の気持の現われとなり、読者に対する不気味な暗示となっている点に注目しなければならない。さらに Razumov は Haldin の妹 Nathalie によって革命家達の仲間に巻き込まれてゆくその過程で、彼女は Razumov に対して次々と誤解して行くのだが、その発端は Haldin の妹に書いた一通の手紙だった。そここのところでは、

Folding up the letter, while I looked at her interrogatively, she explained ——

“These are the words which my brother ap-

plies to a young man he came to know in St. Petersburg. An intimate friend, I suppose. It must be. His is the only name my brother mentions in all his correspondence with me. Absolutely the only one, and —— would you believe it? —— the man is here. He arrived recently in Geneva.”⁽¹³⁾

しかもその人物は次のように祭り上げられる始末である。

“Unstained, lofty, and solitary existences.”⁽¹⁴⁾

つまりこのことは、彼の Razumov とは全くかわりのない所で彼の映像が勝手に作られてゆくことに他ならない。そして Razumov と Nathalie が初めて会った後の彼女の印象を「私」に語るころでは、

“Unstained, lofty, and solitary existences,” she quoted as if to herself. But I caught the wistful murmur distinctly.

“High praise,” I whispered to her.

“The highest possible.”

とさらに高揚して行く。これこそ、強烈な irony であろう。兄を売った裏切り者に対して、尊敬と愛情の混った気持を持ち始め、その気持が一段と高揚して行く。このパターンは兄 Victor が信頼に足る人物と思い込んだのと同じである。そして Nathalie は Razumov に対して “Can you guess who I am?”⁽¹⁵⁾ と尋ねると、握手しようとした手を引込め、彼はよろめいて、テラスの壁によりかかって身をささえたのであった。妹にとっては、この反応がさらに大きな誤解を生むことになる。

“Their friendship must have been the very brotherhood of souls! ……”⁽¹⁶⁾ となり、さらに Razumov が思わず両手をさし出すと、両手で握手をした後、

“…… All I know is, that he put out both his hands then to me, I may say flung them out at me, with the greatest readiness and warmth, and that I seized and pressed them, feeling that I was finding again a little of what I thought was to me for ever, with the loss of my brother — some of

that hope, inspiration, and support which I used to get from my dear dead ….”⁽¹⁷⁾

ここにおいて完全にエスカレートした彼女の心理状態を読み取ることができる。ちょうどこの2人の関係は「ロメオとジュリエット」を想起させる。つまり宿命を持った2人の出会いだと云えると思う。そしてさらに、Nathalie が Razumov と会話をかわす場面で、

“Thank you once more for — for understanding me,” she went on warmly. He interrupted her with a certain effect of roughness……

“What is there to thank me for? Understand? … You had better know that I understand nothing…….”⁽¹⁸⁾

彼女の気持が高揚するにつれて Razumov の方が冷ややかになっていく、ここにも Conrad の irony を見出すことができる。しかも相手に冷水を浴びせるような言葉である。それから「私」の観察、すなわち冷静な西欧人の観点で次のように語られる。

I looked at him rather hard. Was there a hidden and inexplicable sneer in this retort? No. It was not that. It might have been resentment. Yes. But what had he to resent? He looked as though he had not slept very well of late. I could almost feel on me the weight of his unrefreshed, motionless stare, the stare of a man who lies unwinking in the dark, angrily passive in the toils of disastrous thoughts.”⁽¹⁹⁾

ここではっきりと彼 Razumov の裏切りに対する想念を述べているのである。主人公 Razumov が、正常の分別を持ち、真面目で、真摯な性格の持ち主故の悩みを表現しているのである。彼 Razumov が Haldin の事件に巻き込まれ、そこで、一度は Haldin を逃がさせるために Ziemianitch の所へ行くが、Ziemianitch が泥酔していたことによって彼は結果的に裏切らざるを得ない選択をせまられたのだった。果してこれが裏切りと云えるかどうかは疑問である。がそのために Haldin が処刑されたことが、彼に大きな衝撃を与え、裏切りの意識を持つに至った考えるべきである。この条件設定が “Lord Jim” における Jim の場合も全

く同じである。二者択一が非常に困難な状況において、彼が船から飛び下りた場合がそれである。つまり Conrad はいずれの場合も、ある極限状況の中の倫理意識を描きたかったものと思われる。この点については A. G. Guerard が次のように言及している。

The Razumov who chooses to protect society and who betrays the outlaw brother and double Victor Haldin has betrayed himself first of all. But it is rather with *Lord Jim* that *Under Western Eyes* demands to be examined, if only because the two novels are more comparable in length and density.⁽²⁰⁾

Razumov は一つの流れの中に巻き込まれたのである。自分の意志の力ではどうにもならないような外側からの運命的とも云える力の中にはまり込んだのだ。第2部の終りの部分がそれを象徴的に物語るのである。

No, he had not moved. He hung well over the parapet, as if captivated by the smooth of the blue water under the arch. The current there is swift, extremely swift ; it makes some people dizzy ; …… Some brains cannot resist the suggestion of irresistible power and of headlong motion.

It apparently had a charm for Mr. Razumov. …… The way he had behaved to me could not be put down to mere boorishness. There was something else under his scorn and impatience. Perhaps, I thought, with sudden approach to hidden truth, it was the same thing which had kept him over a week, nearly ten days indeed, from coming near Miss Haldin.⁽²¹⁾

この文章の中に、流れの中に巻き込まれ (involve) て、しかも、それから離脱 (detach) しようとする Razumov の姿を読みとれるであろう。

第3部に入ってからこの involvement の状況が進行する。さらに前の出会いから数日経過して、Nathalia は「私」に次のように語る。

She kept mysteriously silent for a moment. Then with energy, but in a confidential tone —
“I am convinced,” She declared, “that this

extraordinary man is meditating some vast plan, some great undertaking ; he is possessed by it — he suffers from it — and from being alone in the world.”⁽²²⁾

この彼女の言葉は少しずつその調子に変化して、独断の傾向を帯びて来ているのである。いや、独断より断定に近い調子である。

今度は Razumov と Peter Ivanovich と会話の部分である。

“On my word, young man, you are an extraordinary person.”

“I fancy you are mistaken, Peter Ivanovitch. If I were really an extraordinary person, I would not be here, walking with you in a garden in Switzerland, Canton of Geneva, Commune of— what’s the name of the Commune this place belongs to? … Never mind — the heart of democracy, anyhow. I am no more extraordinary than the rest of us Russians, wandering abroad.”

But Peter Ivanovitch dissented emphatically —

“No! No! You are not ordinary. I have some experience of Russians who are — well — living abroad.

You appear to me, and to others too, a marked personality.”⁽²³⁾

ここに至って Peter Ivanovitch も又、Nathalie と同様に、Razumov を誤解してゆく。しかしこの誤解は外見から受けた印象、彼の態度、物腰と云ったものからの推量によるのである。‘appear’ と云う語がその事を如実に物語っているのである。そしてさらに Peter Ivanovitch の言葉使いが変化する場面では、

“H’m, yes! That — no doubt — in a certain sense …” He raised his voice. “There is a deal of pride about you …”

The intonation of Peter Ivarovitch took on a homely, familiar ring, acknowledging, in a way, Razumov’s claim to peasant descent.

“A great deal of pride, brother Kiryo. And I don’t say that you have no justification for it. I have admitted you had.

You are one of us — *un des notres*. I reflect on that with satisfaction.”⁽²⁴⁾

ついに Razumov は Peter Ivanovitch から過度の誤解を受けた結果、革命家の一人にされてしまうのである。彼が嫌って離脱しようとすればする程、巻き込まれていくと云うこの設定は irony 以外の何物でもない。

Razumov はかくして彼をジュネーヴに送り込んだ官憲の思惑どおりに革命家たちをスパイできる環境に身を置くことになる。しかし、彼の心には Nathalia の尊敬と愛に対して裏切っている意識が強くなっていくのを抑えることができないのである。そのような状況の中で、彼は革命主義者の女団士である Sophia に会う。そこで突然、彼女の質問を受ける。

“Tell me : is it true that on the very morning of the deed you actually attended the lectures at the University?”⁽²⁵⁾

彼女の不意打にあって一瞬、彼は動転し、声が出ない。しかし、彼は Sophia の次の言葉を聞いてほっとするのである。

“Come, Kiryo Sidorovitch!” she urged him. “I know you are not a boastful man. *That* one must say for you. You are a silent man. Too silent, perhaps.

You are feeding on some bitterness of your own.

You are not an enthusiast. You are, perhaps, all the stronger for that. But you might tell me. One would like to understand you a little more. I was so immensely struck ... Have you really done it ?”⁽²⁶⁾

瞬間的に受けた衝撃からは立ち直ったものの、新しい不安が彼の心に生じたのだった。しかしそれも、Ziemianitch の自殺によって自分の身が安全になり、革命家の一員となって、万事が好都合に運んだのだが、Nathalia の純粋な愛に負けて、彼も又 Nathalia を愛し始めた為に、彼の心の中には自己矛盾が生ずるのである。当初、彼が心の中に抱いていた感情は、Haldin に対する憤りであった。自分のロシアに於ける平凡で、堅実な生活を破壊したことに対して、その妹から魂を奪うこと

が復讐なのであった。それらすべての彼の願いが成就せんとしているときに、彼は自分のついてきた嘘と、Nathalia に対する裏切り、Ziemianitch の無実に対して、良心の責めに耐えられない。そして Nathalia の愛が強くなり、彼の愛も高まるにつれてますます、自責の念に駆られ、ついに全てを告白して、心のやすらぎを得る。

彼の今迄の真実を告白した記録帖には、次のように書かれた。

I felt that I must tell you that I had ended byou. And to tell you that I must first confess. Confess, go out — and perish.

Have I then the soul of a slave? No! I am independent — and therefore perdition is my lot.”⁽²⁷⁾

‘go out — and perish と云う言葉は、実は第 1 部の Mikulin との対話で、

“To retire,” he repeated.

“Where to?” asked Councillor Mikulin softly.”⁽²⁸⁾

の部分の ‘Where to?’ に対する答とも受け取れ、非常に含蓄のある言葉となっている。

さてこの作品の中の Detachment と Involvement に関して 2 種類の Detachment と Involvement が存在する。まずは Conrad 自身が作品に対する関係としてとらえる Detachment と Involvement である。この論の最初で述べたように彼自身がこの作品に過度に involve (巻き込まれる) されないように、はなれて、書こうとしたことである。そのために、「私」なる人物を登場させ、「私」の眼を通して、この作品が構成されていることである。しかも「私」はイギリス人で、ロシア的、東洋的心情は理解できない人間である。Conrad はそこに「離脱」の条件設定をしたのである。これは Author's Note の通りであろう。しかもこの Conrad の化身とも云える「私」は Nathalie の唯一の孤独をいやしてくれる人物であり、Razumov からは「悪魔」と思われる人物なのである。この点においても *Lord Jim* の Marlow の役割と一致する学者も多い⁽²⁹⁾ のは当然であろう。しかし *Lord Jim* に於ける Marlow は Marlow 自身の人物像が鮮明で、活き活きとして、その役どころにぴったりであるのに反して、「私の」なる人物の人物像は

浮かんで来ないのである。その代表的な意見として、C. B. Cox のものがある。

Conrad's use of the English teacher as narrator is a most unsatisfactory device. This is partly a technical weakness. His presence during the confession scene between Razumov and Nathalia is embarrassing, as if he were a voyeur peeping in at this scene of torment. We may echo Razumov's complaint: 'How did this old man come here?'⁽³⁰⁾

と云って、「私」なる人物は失敗だとの指摘があるが、やはりこの点は、この作品の欠点のように思える。ついでに、又別の点で欠点を指摘する声もある。それは *Under Western Eyes* はドラマティックな象徴的な誇張が多いことだと云う Palmer⁽³¹⁾ であろう。老語学教師「私」の存在は、作品の迫力を弱め、Nathalia と Razumov との間に介在し、特に Razumov の人物像をぼかしていると云えよう。その意味では、C. B. Cox の Conrad 自身が作品から「離脱」しようとするのは、作品の存在理由が希薄になることと意味する⁽³²⁾と云っているのは当然であろう。筆者も、作家は作品に対して、involve（巻き込まれて）されていて、始めて作家の訴えるものが感じられるのではないかと考える。

さて次は作品の中に於ける detachment と involvement に移る。主人公 Razumov は Haldin の恣意によって事件に involve してゆき、その結果、祖国からの「離脱」、家庭と学生仲間からも「離脱」してゆく。彼の場合、detachment と involvement とが常に同居しており、お互いに因果関係を持ちながら、彼の破局へと迫りやるのである。あらゆるものから離脱して、最後に全くの孤独になったときに、やはり彼と同じ状況にあった Tekla と共にひっそりと広いロシアのどこかで暮すと云う結末は Conrad 一流の irony であろう。もはや Razumov は耳が聞えなくて、決して 'involve' されることないのだから。さて最後に「ロシア的なもの」に触れておこう。西欧人には理解できないものと云っているのは、作品の中によく出てくる、独裁政治のとり処置なのであろう。これは西欧では想像を絶するものなのだ、と云うことを、Conrad は意図していたのだと思う。幼い時に受けたロシア的なもの、と云えば、想像を絶する専制政治の恐

ろしさであろうからである。Razumov が事件当夜、下宿の自分の机の上で書いた一片の日誌の言葉、

History not Theory.

Patriotism not Internatinalism.

Evolution not Revolution.

Direction not Destruction.

Unity not Disruption⁽³³⁾

訳、理論ではなくて歴史

国際主義ではなくて愛国主義

革命ではなくて進歩

破壊ではなくて指向

分裂ではなくて統一

この紙を壁に貼っていたばかりに、官憲に押収され、スパイにされると云う、専制政治の持つ暗黒面、これがロシア的なものの内容なのであろう。この紙片から、Razumov の悲劇が始まったのだとは、西欧人、特にイギリス人は考えないだろうと、Conrad は前提したのである。しかし現在でもこの作品が読まれていると云うことは、この小説が現代的意味を持ち続けていることに外ならないと思うのは筆者だけではあるまい。

注

作品中の全引用は *Collected Edition of the works of Joseph Conrad* (London: J. M. Dent & Sons, 1961) に収められた *Under Western Eyes* からである。以下 U. W. E. と略す。

(1) U. W. E., Author's Note, p. vii.

(2) Gerard Jean-Aubry, *The Sea Dreamer: A Definitive Biography of Joseph Conrad* (London: George Allen & Unwin, 1957) p. 253.

(3) U. W. E., Author's Note, p. viii.

(4) *The Secret Agent*, p. 5.

(5) Ibid., p. 6.

(6) U. W. E., Author's Note, p. ix.

(7) Ibid., p. 15.

(8) Ibid., p. 16.

(9) Ibid., p. 19.

(10) Ibid., p. 32.

(11) Ibid., p. 37.

(12) Ibid., p. 117.

(13) Ibid., p. 135.

(14) Ibid., p. 135.

(15) Ibid., p. 171.

- (16) Ibid., p. 172.
- (17) Ibid., p. 172~173.
- (18) Ibid., p. 180.
- (19) Ibid., p. 183.
- (20) Albert J. Guerard, *CONRAD THE NOVELIST*
(Massachusetts : Harvard Univ. Press, 1969)
p.231.
- (21) U. W. E., p. 197.
- (22) Ibid., p. 202.
- (23) Ibid., p. 205~206.
- (24) Ibid., p. 209~210.
- (25) Ibid., p. 254.
- (26) Ibid., p. 254~255.
- (27) Ibid., p. 361~362.
- (28) Ibid., p. 99.

- (29) John A. Palmer, *Joseph Conrad's Fiction* (New York, Cornell Univ. Press, 1968) p. 126.
- (30) C. B. Cox, *Joseph Conrad : The Modern Imagination*(London, J. M. DENT & SONS, 1974)p. 104.
- (31) John A. Palmer, op. cit., p. 133.
But the most troublesome feature of *Under Western Eyes* is its dramatic and symbolic exaggeration. When the reader learns that Razumov “had set his teeth so hard that his whole face ached [and] it was impossible for him to make a sound.” (p. 62) ……とある。
- (32) C.B.Cox, op. cit., p. 104.
- (33) U. W. E., p. 66.

(昭和 52 年 11 月 30 日受理)

